

六 北条氏直の時代 うじなお

1 秀吉との小田原合戦

五代氏直は、一八才で父、氏政のあとをつぎました。うじまさ

一五八二年、氏直は北条氏の大將として上野こうずけの国（今の群馬県）に攻めこみ、その戦いに勝利して信濃しなのの国まで進んでいきました。やがて、甲斐かいの国に攻め

こむと、そこに進出してきた徳川家康と対立することとくがわいえやす

となりました。その後、上野は北条氏の領地、甲斐・信濃は徳川氏の領地とするこ
とで話し合いがつき、戦いはしないことになりました。そして、徳川家康の娘の督とく
姫が氏直にとつぎました。

織田信長の死後、勢力を広げていた豊臣秀吉は、関東地方で秀吉の許しがなけれ
ば戦ができないきまりいくさ（関東惣無事令かんとうそうぶじれい）をつくりました。

「なんて勝手なきまりなのか。豊臣とよとみの思うがままにはさせないぞ。」



と、氏政・氏直は秀吉との戦いを意識して備えていました。

二人は、秀吉に「京都に來い。」と言われてもすぐには動かず、先延ばしにしていました。秀吉の強い求めに、氏政・氏直はついに京都市行きを決意しましたが、その矢先に、北条氏の家臣が、秀吉の家臣の城である名胡桃城（今の群馬県）を勝手に占領してしまいました。

「おのれ、北条氏め！」と、秀吉は北条氏を攻めることを決め、大名たちに北条氏を攻めることを呼びかけました。

秀吉の求めに応じて集まった軍勢は、約十五万とも二十二万とも言われています。この大軍を率いて、秀吉は小田原攻めを開始しました。秀吉軍は山中城（今の静岡県）を攻め落とすと、箱根の早雲寺に本陣を構え、小田原城を包囲しました。



小田原を攻める相談をする秀吉と家康

いっぽう、氏政・氏直の軍勢は約五万。かねてから秀吉軍が攻めてくるのに備えて、小田原城のまわりを堀や土塁（土を盛り上げて作った城壁）などで囲んでいた。北条氏は、この大軍を相手に、これまでの経験から城に立てこもる作戦をとりました。また、領国内の城にも兵をおいて対抗しましたが、北条氏の城は次々に攻め落とされてしまいました。

2 小田原城のあけ渡しを決意した氏直

戦が長引けば長引くほど、外から助けがない北条軍は不利になるばかりです。城の中では、城に立てこもるか、城の外で戦うか、北条家の人々と家臣との間で、何日も話し合いがもたれました。この時の話し合いが「小田原評定」とよばれるものです。長い話し合いの結果、家臣や城下の人々の命を守るために、秀吉に城をあけわたすことになったのです。

氏直は、自ら秀吉方の陣地に出向きました。そして、

「わたしの命は惜しみません。しかし、なにとぞ、
家臣や領民たちの命はお助けください。」

と、自分が切腹することによって家来の命を助けて
もらうように、秀吉に頼みました。

秀吉は、申し出た時の氏直の態度がとても立派で
あり、また、氏直が家康の娘の夫でもあったので、そ
の命を助けることにしました。

氏直は紀伊の国（今の和歌山県）の高野山に謹慎（
罰として、外に出ないで、行いを慎んで引きこもるこ
と）を言い渡され、命は助けられました。氏政とその弟の氏照、そして重臣二名が

切腹となりました。その後、氏直の罪は許されましたが、一五九一年、病氣のため
に、三〇才の若さで亡くなったのです。

早雲が伊豆に進出してから、約百年にわたって関東を支配した北条氏も、この小
田原合戦をきっかけに、戦国時代の表舞台から姿を消すことになったのです。



今に伝わるエピソード

小田原城を完全に取り囲んだ秀吉は、ひでよし

「ここに城があらわれれば、北条の軍勢たちも驚いて、戦う気をなくすにちがいない……。」ぐんぜい おどろ

と、早川の南の山（石垣山）いしがきやまに一晚で城をつくり

ました。これが有名な「太閤の一夜城」たいこう いちやじょうです。秀

吉が思ったとおり、北条軍の兵たちは、山の上にあつという間に見たこともない城ができたのを見て、とてもあわてたと言われています。

しかし実際は、城が完成してから、夜のうちに小田原城に向いている木を切り払って、あたかも一晩でできたように見せかけたもので、実際には城の工事には八十日かかったと言われています。

そのようなたくらみをしなくてはならないほど、秀吉は小田原城を簡単に落とすことはできな
きないと思っていたのです。

